

青年期における自我の形成*

東京大学

吉川 房 枝**

I 問題と方法

この研究は、中学生、高校生の自我意識を、自己受容（自己の現実を率直に認識する自由をもち、自己の本質的価値を確信して、その可能性を積極的に発揮すること）の問題との関連において考察しようとしたものである(1)。すなわち、(1) 青年は自己をどのように意識するか、(2) それは他人の評価や態度と、どのような関係があるか、(3) 青年が正しく自己を理解し、健全な自己受容の態度を獲得するためには、どのような援助が可能であるか、などの問題を、発達的にあきらかにしようとするものである。

方法は、中学生、高校生の作文や、かれらに施した質問紙調査によって得た資料の分析である。

II 青年期における自我意識のあり方

1) 自己描写における自我意識の特徴

中学および高校の女子生徒190名に「私」という題で作文を書かせた。これをみると、かれらはその自己描写において、「私」という語が意味する多くの内容の中から、ある一、二の面を強調して記述している。これらを、その内容によって大きく4つのカテゴリーにわけてみることができる。すなわち、(1) 身体的特徴（身長、容姿、体質、動作挙動などを含む）(2) 内的特徴（気質、能力、欲望、趣味、過去の思い出、将来への希望と予期、計画、現在の役割と責任などを含む）(3) 対人関係（他人との関係における自分の地位、自分の他人に対する感情や態度、他人の自分に対する態度などを含む）(4) 生活態度（個人生活の価値や目的の探求、道義、信仰などを含む）と分けることができる。

これを学年別にみると Table 1 のようになる。これらのカテゴリーは、相互に関連しあっており正確に区別

* Development of self-consciousness in the adolescence.

** by Yoshikawa, Fusae (University of Tokyo)

できないものであるから、数字を厳密な意味にとることはできないが、自己描写にあたって青年たちが、どのカテゴリーに強く光をあてて書くかというおおよその見当はつく。すなわちこの分類にしたがっていえば、各学年を通じて多くの者が、自己の内的特徴とともに対人関係における自己というものをとりあげて記述することがわかる。また年齢の変化に応じて、カテゴリーの種類も、各カテゴリー内部の内容も、だんだんに変化してゆくことが認められた。身体的特徴について記す者は、中学1年

Table 1 自己描写のカテゴリー別人数

学年(人員)	中1 (44)	中2 (46)	中3 (51)	高1 (49)	計 (190)
1) 身体的特徴	9	6	3	2	20
2) 内的特徴	32	36	28	37	133
3) 対人関係	38	33	34	34	139
4) 生活態度	1	10	23	32	66
計*	80	85	88	105	358

* 1人がいくつかのカテゴリーにわたって記述するから合計は調査人員よりも多くなる。

が最も多く上級になるにしたがって少なくなる。これに対し、生活態度についてはその逆になるというのが特徴的である。高校1年では、特に個人生活の価値の問題を取り扱うことが目立っていた。内的特徴と対人関係は、数のうえからいつて学年による変化はないが、内容的には、いくつかの変化をみせている。たとえば、中学1年では、自分の内的特徴としての性質を、「おてんば」「はずかしがり」「おこりんぼう」というように、単純なものとして記述するが、学年のすすむにしたがって、複雑な、矛盾するものとして、また場合によって変化するものとしての記述が多くなる。次にあげる例文は高校1年のものである。

「私の心、頭の中には、いつも2つの矛盾しあつたものが入っている。いつもたたかっているみたいに反撥しあっている。」

「一部にはすごく幼稚なところがあつて、又他の一部にはすごくロマンティックなところのある私。」

「さわぐかと思うときびしがる。」

「くよくよしたり大胆になつたり。」

対人関係においても、中学1年では両親や同胞との関係がほとんどを占め、上級になるにつれて友人関係が増してくる。たとえば、中学1、2年生では、親の言いつけに従わない自分や、兄弟げんかをする自分を悪い自分として記し、中学3年、高校1年になると、友人を愛せない利己主義な自分、自分中心の、みにくい自分を、なさない、いまわしいものとして記す。将来は両親をよろこばせたい、という下級生の希望は、上級生では、社会の人々のためになりたい、精神的、道徳的、物質的に貧しい人々を助けたい、という希望に変わってくる。

青年の自己描写において、特に注目すべき3つの点があげられる。第1に、ほとんどのものが、対人関係における、あるいは他人を意識した自己描写を含んでいた。かれらの「私」に冠する修飾語の多くは、他人を含むものである。「丈夫な母をもつて幸福な私」「義理の姉の子がいなければ幸福だと思う私、そのような考えをもつことを悪いことだと感じている私」「無愛想な態度をされて自分は決してそういう態度はすまいと思う私」「父の愛を受けて威張っている兄に目下あつかいされて腹を立て、弟に八つ当たりしたくなる私」など、かれらの希望やよろこび、悲しみと不安、反省や決意、満足感と不満感の多くが対人関係から生まれてくることを示した。

第2に、非常に多くのものが、なんらかの意味で自分を好ましいものあるいは好ましくないものとして表現した。それは自分の「長所」または「短所」「欠点」として、あるいは「自分に満足している自分」または「自分に不満足である自分」として記述されている。そうして全学年を通じて、自己を好ましくないものとして表現した者の方が、好ましいものとして表現した者よりもあきらかに多かつた。長所（または自己に対する満足）を記した者と短所（または自己に対する不満足）を記した者との人数を比較すると Table 2 のようになる。

下級生では自己評価にあたつて、自分の「よいところ」「わるいところ」をあげる仕方であるのに対して、上級生では、自分が「好き」「嫌い」、自分に「満足」「不満足」という表現をとるものが多くなってくる。高1では自分に満足を感じていると書く者は非常に少ない。中学1、2年生は自分の弱点や短所をあげても、努力しさえすればと、将来に単純な期待をかけ、幸福を感じている。しかしいずれにしても、自己への消極的、否定的な評価をする者の方が、積極的、肯定的な評価をす

Table 2 長所・短所および自己への満足・不満足を記述した人数*

学年 (人員)	中1 (44)	中2 (46)	中3 (51)	高1 (49)	計 (190)
長所(自己への満足)	12(1)	14(1)	3(7)	5(1)	34(10)
短所(自己への不満足)	32	31(4)	17(11)	16(18)	96(33)
計	44(1)	45(5)	20(18)	21(19)	130(43)

* 自己の長所・短所をあげた人数と、自己への満足・不満足という表現をとつた人数とを区別して、後者を()内にいれた。

る者よりも、ひかえ目にみても2倍ないし3倍は多い。

第3に、これらの自己評価または自己に対する態度は社会的規準との関連において記述されているものが多かつた。まず、他人の批評、他人の是認や否認との関連において自己の価値、無価値を評定する。これは特に下級生についていちじるしい。中学1、2年生では、親や先生が注意を与えたり、褒めたりしたことがそのまま自分の「短所」や「長所」として意識され、記述されているものが多い。一例をあげれば、

「私はよく父母から意志が弱いと言われる。……私の欠点は意志が弱いということが一番大きい。ほかにも私はわがままだとも言われる。……わがままは人からきらわれるし、あまりいい性質ではない。私には欠点がとても多い。でも父母から『〇〇(自分)は親切だ』と言われる。私はこの親切という言葉をずーつとのばして行こうと思つている。」(中1、13才7ヵ月)

というようなものがある。特に両親からの評価は大きな力をもつていると思われるが、友だちや同胞からの影響もある。上級になつても同様なものがないわけではないが、学年がすすむにつれて、少なくとも意識の上では他人の判断や評価をそのまま自己のものにしないという態度が少しずつ出て来る。同時に青年たちは、他人の批評や意見に敏感であり、またそれを聞くことを望んでいる。かれらは、「注意されるとすぐ反撥するくせに」他人からの批判をほしくてし方がない、と記している。自己を客観的に判断しようとする欲求は、他人の立場に立つて自己をみることを要求するのである。自己評価に他人の評価をとり入れる仕方は、上級生と下級生では幾分変わつて来るとしても、他人の評価が自己評価に相当の力をもっていることは、上級生においても予想される。

2) 好ましい自己と好ましくない自己

自由に書かれた作文から分析されたことをさらに広い範囲で調べるために、調査表を作成して、中学1年から高校3年までの女子生徒526名、中学1年から高校2年

までの男子生徒 753 名, 総計 1279 名に記入してもらった。調査表は次のような 5 問から成る。

次の問に答えて下さい。字数に制限はありませんから書く場所が足りなかつたら, 別の用紙を貼附して下さい。(氏名を記入する必要はありません。)

1. あなたは, 自分で自分のどこが好きですか。
2. あなたは, 自分で自分のどこが嫌いですか。
3. 他の人があなたに対して, どんな批評をしますか。それについてあなたはどう思いますか。(他の人というのは, 親・兄弟・姉妹・先生・友達・近所の人・その他すべての人を含みます。)
4. 他の人があなたを怒らせたり, 嫌な気持ちをもたせるのは, どんなときですか。それについてあなたはどう思いますか。
5. このようなこと (1~4) を考えてみることにについて, あなたはどう感じますか。例えば「もつと自分や他人のことについて知りたい」とか, 「このよう

な問題について考えるのは面白くない, 不愉快だ」とか, その他の感想や希望があれば書いて下さい。

この中, はじめの 3 問の主な目的は, 自我意識の内容を, 自分で好ましいと思うものと, 好ましくないと思うものの 2 つのカテゴリーに分けて書かせて, これが他人の評価と, どのような関係にあるかをみようとしたものである。ここでは問 1 と問 2 の答の分析の結果を概観してみよう。

問 1 「あなたは, 自分で自分のどこが好きですか」について, 結果の概要は, Table 3, 4 のようである。

問 2 「あなたは, 自分で自分のどこが嫌いですか」について, 結果の概要は, Table 5, 6 のようである。

カテゴリーの説明をすると,

- (1) 身体・動作……作文の分析における「身体的特徴」のカテゴリーにあたる。
- (2) 技能・興味……作文の分析における「内的特徴」の一部。

Table 3 自分で自分の好きなおところ(女子) 人数と調査人員に対する%

学年(人員)	中1 (123)	中2 (110)	中3 (69)	高1 (111)	高2 (59)	高3 (54)	計 (526)
1) 身体・動作	18人 14.6%	5 4.5	2 2.8	3 2.7	3 5.1	1 1.9	32 6.1
2) 技能・興味	27 21.9	6 5.5	8 11.6	18 16.2	3 5.1	0 0	62 11.8
3) 性格・人格	73 59.3	59 53.6	36 52.2	63 56.8	30 50.8	30 55.6	291 55.3
4) 対人感情・態度	35 28.5	35 31.8	27 39.1	47 42.3	27 45.8	17 31.5	198 37.6
5) 自己抑制	5 4.1	5 4.5	5 7.3	7 6.3	1 1.7	5 9.3	28 5.3
6) 全体的に好き	2 1.6	1 0.9	2 2.8	4 3.6	0 0	0 0	9 1.7
7) 好きなおところなし	7 5.7	17 15.4	11 15.9	12 10.8	9 15.3	10 18.5	66 12.5
8) 不答又は「わからない」	3 2.4	8 7.3	6 8.7	9 8.1	5 8.5	7 13.0	38 7.2

Table 4 自分で自分の好きなおところ(男子) 人数と調査人員に対する%

学年(人員)	中1 (156)	中2 (160)	中3 (157)	高1 (147)	高2 (133)	計 (753)
1) 身体・動作	26人 16.7%	30 18.7	26 16.6	15 10.2	8 6.0	105 13.9
2) 技能・興味	42 26.9	32 20.0	41 26.2	33 22.4	20 15.0	168 22.3
3) 性格・人格	78 50.0	86 73.8	71 45.2	96 65.3	66 49.6	397 52.7
4) 対人感情・態度	53 34.0	48 30.0	54 34.4	92 62.6	43 32.3	290 38.5
5) 自己抑制	6 3.8	8 5.0	8 5.1	13 8.8	3 2.3	38 5.0
6) 全体的に好き	2 1.3	4 2.5	1 0.6	1 0.7	7 5.0	15 2.0
7) 好きなおところなし	0 0	5 3.1	11 7.0	3 2.0	10 7.5	29 3.9
8) 不答又は「わからない」	6 3.8	4 2.5	5 3.2	6 4.1	22 16.5	43 5.7

- (3) 性格・人格……作文の分析における「内的特徴」と「生活態度」にあたるものを含む。
- (4) 対人感情・態度……作文の分析における「対人関係」のカテゴリーに属する。
- (5) 自己抑制……対人関係において, 感情の自由な表出に関するもの, 特に怒りや嫌悪の情または態度を抑えようとする努力に関するものを含む。
- (6) 全体的に好き, または全体的に嫌い……「自分のすべてが好き」「どこもみな嫌い」「どここいつて言えないが好き」などの表現をとっているものを含む。
- (7) 好きなおところなし, または嫌いなおところなし……「好きなおところなんて一つもない」「嫌いなおところはなにもない」と表現したものと, 「なし」とだけ書いたわずかなものを含む。
- (8) 不答または「わからない」……なにも記入してないもの「自分の好きなおところなんてわからない」「こんなことは

Table 5 自分で自分の嫌いなところ(女子) 人数と調査人員に対する%

学年(人員)	中1 (123)	中2 (110)	中3 (69)	高1 (111)	高2 (59)	高3 (54)	計 (526)
1) 身体・動作	23人 18.7%	21 19.1	10 14.5	5 4.5	6 10.2	0 0	65 12.4
2) 技能・興味	32 26.0	13 11.8	7 10.1	15 13.5	11 18.6	4 7.4	82 15.6
3) 性格・人格	87 70.7	67 60.9	52 75.4	82 73.9	19 32.2	35 64.8	342 65.0
4) 対人感情・態度	31 25.2	32 29.1	30 43.5	61 55.0	29 49.2	23 42.6	206 39.2
5) 自己抑制	30 24.3	33 30.0	14 20.3	27 24.3	10 16.9	10 18.5	124 23.6
6) 全体的に嫌い	0 0	0 0	2 2.8	5 4.5	1 1.7	1 1.9	9 1.7
7) 嫌いなところなし	2 1.6	5 4.5	1 1.4	2 1.8	2 3.4	0 0	12 2.3
8) 不答又は「わからない」	0 0	2 1.8	1 1.4	1 0.9	2 3.4	5 9.3	11 2.1

Table 6 自分で自分の嫌いなところ(男子) 人数と調査人員に対する%

学年(人員)	中1 (156)	中2 (160)	中3 (157)	高1 (147)	高2 (133)	計 (753)
1) 身体・動作	34人 21.8%	44 27.5	43 27.4	27 18.4	9 6.8	157 20.8
2) 技能・興味	23 14.4	47 29.4	28 17.8	21 14.3	24 18.0	143 19.0
3) 性格・人格	83 53.2	115 71.9	107 68.2	119 81.0	86 64.7	510 67.7
4) 対人感情・態度	37 23.7	32 20.0	32 20.4	79 53.7	48 36.1	228 30.3
5) 自己抑制	56 35.9	47 29.4	38 24.2	46 31.2	31 23.3	218 29.0
6) 全体的に嫌い	0 0	1 0.6	1 0.6	1 0.7	4 3.0	7 0.9
7) 嫌いなところなし	0 0	0 0	0 0	3 2.0	9 6.8	12 1.6
8) 不答又は「わからない」	1 0.6	0 0	2 1.3	1 0.7	8 6.0	12 1.6

人からみなければわからない」というようなものを含む。

表をみると、男女に多少のずれはあるが、全体として作文の分析から得た結果と、ほぼ同様な傾向をとっている。男女ともに、好きなおところでも嫌いなおところでも、対人感情・態度に関して記述したものが性格・人格に関して記述したものに次いで非常に多く、かれらの自己感情(自分に対する満足・不満足)が対人関係に多くかかっていることを示している。また上級生の方がこのカテゴリーに記すものが多くなり、特に嫌いなおところについてそういえることは、対人関係の複雑化とともに、他人に対する関心の増大を示すものと考えられる。男子では対人感情・態度のカテゴリーに属するものを好きなおところとしてあげる者の方が、嫌いなおところとしてあげる者の人数より多く、女子では中学1, 2年を除けば、その逆になっていることは注目される。

身体・動作や技能・興味などをあげる者は、上級生に

なるにつれて少なくなる傾きがあるが、男子では、技能や興味を好きなおところに記す者が上級生になつても割に多い。これは対人感情・態度とともに、数のうえで男女差のみられる2つの特徴である。

男子の技能・興味と対人感情・態度のカテゴリーを除けば、全体にみて、自分の好きなおところよりも嫌いなおところを記す者が多いが、特にいちじるしい差を示しているのは、自己抑制のカテゴリーに属するものである。すなわち、自分自身の嫌いなおところとして、「怒りつばい」ことをあげる者が多く、「怒り」を抑えることの困難と努力がうかがわれる。

また、好きなおところに「なし」と記す者は嫌いなおところに「なし」と記す者よりもあきらかに多かつた。自分自身について青年たちがあげた、好きなおところと嫌いなおところの項目数を示すならば、Table 7, 8 のようになる。

このように、自分の嫌いなおところを好きなおところよりも多く意識することは、自己受容の問題になんらかの意味をもつて違いないが、このような傾向は何に基づくのであろうか。まず青年たちのことばから推測すると、自分の長所または好きなおところをより少ししか書かない理由の一部として、(1) 自分の長所を考えることは自慢になりやすく、増長をまねくおそれがある。(2) 自分は自慢できるほど、完全でない。(3) 自慢話はおかしい。という考えが根底にあると思われた。他方、自分の短所や不足について考えることは、「反省になり」「人格の向上」の基礎になると述べたものが相当あつた。すなわち、自分にはやく満足してしまうことは、向上心を失わせ、あるいは自分で満足していても、それが「真実ではなく」他人からみれば「おかしい」ものであり、受け入れられないものであるかもしれないのである。これ対し、自分の欠点や弱点をみることは、劣等感や卑下の感情を起すからいやだ、と書いたものもあつた。自己の欠点や不足への意識に、2

Table 7 好き嫌い別の項目数 (女子)

太字は好きのところ 細字は嫌いのところ

学年 (人員) カテゴリー	中 1 (123)		中 2 (110)		中 3 (69)		高 1 (111)		高 2 (59)		高 3 (54)		計 (526)	
	1) 身体・動作	24	29	7	26	2	15	3	7	3	8	1	0	40
2) 技能・興味	27	39	9	13	9	8	21	16	3	12	0	4	69	92
3) 性格・人格	106	130	80	87	43	74	104	139	46	49	43	54	422	533
4) 対人感情・態度	48	33	49	34	34	35	55	89	37	52	22	31	245	274
5) 自己抑制	5	30	6	33	5	15	7	28	1	10	5	10	29	126
計	210	261	151	193	93	147	190	279	90	131	71	99	805	1110

Table 8 好き嫌い別の項目数 (男子)

太字は好きのところ 細字は嫌いのところ

学年 (人員) カテゴリー	中 1 (156)		中 2 (160)		中 3 (153)		高 1 (147)		高 2 (133)		計 (753)	
	1) 身体・動作	28	39	34	55	31	49	16	32	8	11	117
2) 技能・興味	47	27	35	58	46	28	37	21	25	27	190	161
3) 性格・人格	90	97	102	146	80	128	164	197	93	135	529	703
4) 対人感情・態度	55	43	55	39	65	35	135	88	58	61	368	266
5) 自己抑制	6	56	8	47	8	38	13	47	3	31	38	219
計	226	262	234	345	230	278	365	385	187	265	1242	1535

つの異なる態度, すなわち, 向上への努力と自己卑下, 自己蔑視とをみることが出来る。

3) 自己感情についての考察

自己感情, すなわち自己に対する満足と不満足が, 客観的事実のいかにのみかかわるものでなく, われわれが想像する自己の可能性と, 現実における成就との比によつて定まることは, すでに古く W. James によつて述べられている。かれは, それを次の公式で示している(2)。自己満足 = $\frac{\text{成功}}{\text{願望}}$ この場合, 単に願望や成功の大小が問題となるばかりでなく, どんな種類の自我が可能的自我として願望され, どんな種類の自我において成功しているかが問題となることを特に注意している。

この理論を青年たちの自己評価に適用するならば, かれらが自己について長所よりも短所を多く意識し, 満足よりも不満足を感じている者が多いということは, かれらの可能的自我における願望が大であり, 自己実現における成功が小であるということになる。またかれらは同じく短所をあげ自己に対する不満を述べていても, ある者は同時に向上への希望を述べ, 他の者は自己卑下と劣等感を述べている。この点については, まだ十分な理論的, 経験的分析がされていない。ただ, これは可能的自我の意識と現実的自我の意識の強さの相違によるもので, 両者の比較において, 前者に焦点をおけば希望的となり, 後者に焦点をおけば失望的となるのだ, といえる

かもしれない。青年たちは一般に失意の交代が激しく, その距離もまた大きい。この矛盾は大人にも起こりうるが, 青年期には自己の描く可能的自我と現実的自我とが十分に分化していないため, 可能的自我像を現実的自我であるかのように思いなして満足したり, その理想主義的傾向から, 高い理想を尺度として現実の自己を眺めて敗北を感じたりするのである。青年が自己反省をする場合は, やはりその理想主義から, 欠点, 不満を多く意識するのである。

現実的自我を可能的自我に接近させてゆこうとする過程は, 北村晴朗(3)の「人間の仮面的行動」の説明の中にみられる。人格の形成または再編成のひとつの形として, 自己のあきたらぬ点, 弱点に不満を抱く人が, 自己の持たぬ性格特徴を身につけようとする傾向があつて, このような自己形成の過程では人はしばしば一種の仮面をかぶり, 実際の姿とは異なる態度や挙措を表現しようとする時期を経過せねばならないと述べている。たとえば, 自分の小心臆病であることに不満な人が, 大胆果敢な人になろうとすれば, その努力は往々大胆らしい仮面をかぶることに始まらざるを得ない。このような仮面は自分に意識される場合もされぬ場合もあろう。青年たちは, 「自分で自分の嫌いところ」として「虚栄心」をあげた。すなわち, 人にみせるための自分と, 内面的な自分との差を意識してこれを自分で不満に思っている。すなわち, 北村のいう「仮面」の意識化であるといえる

が、それはまた可能的自我と現実的自我の分離としてみることでもできる。そうして、この分離によつて、自己の不純になやむが、より一層、現実的自我を実際に可能的自我に近づけようとする努力が可能になるのである。このような自己の「虚栄心」や「偽善」への不満は、中学3年ごろから現われはじめ、学年がすすむにしたがつて増えて来た。そうして男子よりも女子の方がやや多かつた。

ところで、一般に人が仮面を必要とするのは、主として社会的承認を得、社会的規準に従おうとする要求に基づいている。また人が自分の人格変革を志すということは、なんらかの意味で可能的社会的自我を実現しようとするに他ならず、人はもしたとえ生存在に、あるいはこの世でかれを承認する他人が存在しないとしても、理想的社会的審判者を考えることができることを、W. Jamesも指摘している⁽²⁾。そうして、他人から何を期待され要求されているかという意識は、人の可能的自我に働きかけ、また、これがどの程度実現されているかという意識、つまり現実的自我もまた、他人の評価に影響されると思われるのである。それは同時に、他人からの期待や評価、その表現として示された態度が、自己感情に大きな影響力をもつに違いない、ということの意味

している。

Ⅲ 自己に対する態度と他人に対する態度との関係

1) 自己評価と他人の批評

自己評価に対して、他人からの評価がどのように働きかけ、また、これがどのように受けいられてゆくかをみるために、青年たちが記した「自分に対する他人の批評」をいろいろな角度から分析した。前述の調査表で、

問3：他の人があなたに対して、どんな批評をしますか。それについてあなたはどう思いますか。(他人というのは、親・兄弟・姉妹・先生・友達・近所の人・その他すべての人を含みます。)

と尋ねた。答えられた他人からの批評の内容を、同じ調査表の問1、問2の答と比較し、また批評に対する本人の意見や感想と照らし合わせて、次の3つに分類した。

(1) 肯定的批評……本人が自分にとって好ましいものとして受けとつている批評。

(2) 否定的批評……本人が自分にとって好ましくないものとして受けとつている批評。

(3) 中立的批評……(1)でも(2)でもない批評。

各カテゴリーに属する批評の項目数と、批評に対する

Table 9 他人の批評に対する反応(女子) 項目数と合計に対する%

反 応		学年(人員)						
		中 1 (123)	中 2 (110)	中 3 (69)	高 1 (111)	高 2 (59)	高 3 (54)	計 (526)
肯 定 的 批 評	好きなところと一致	15	11	6	14	6	9	61
	容 認	15 } 30 (49.2)	10 } 21 (53.8)	7 } 13 (44.8)	11 } 25 (49.0)	6 } 12 (46.2)	6 } 15 (44.1)	55 } 116 (48.3)
	反 撥	13 (21.3)	7 (17.9)	8 (27.6)	11 (21.2)	6 (23.1)	9 (26.5)	54 (22.5)
	そ の 他	18	11	8	15	8	10	70
	合 計	61	39	29	51	26	34	240
否 定 的 批 評	嫌いなところと一致	28	33	16	36	16	13	142
	容 認	42 } 70 (57.4)	31 } 64 (64.6)	19 } 35 (66.0)	33 } 69 (62.2)	14 } 30 (55.6)	9 } 22 (57.9)	148 } 290 (60.7)
	反 撥	13 (10.7)	19 (20.0)	10 (18.9)	19 (17.1)	11 (20.4)	5 (13.2)	77 (16.1)
	そ の 他	39	16	8	23	13	11	110
	合 計	122	99	53	111	54	38	477
中 立 的 批 評	容 認	2	2	0	1	2	0	7
	反 撥	2	2	0	0	0	0	4
	そ の 他	2	2	5	2	0	1	12
	合 計	6	6	5	3	2	1	23
総 計		189	144	87	165	82	73	740

Table 10 他人の批評に対する反応(男子) 項目数と合計に対する%

学年(人員)		中 1 (156)	中 2 (160)	中 3 (157)	高 1 (147)	高 2 (132)	計 (753)
肯定的 批評	好きなどころと一致	10	18	10	18	3	59
	容 認	25 (51.0)	24 (57.1)	13 (41.9)	28 (50.9)	9 (32.1)	99 (48.3)
	反 撥	8 (16.3)	6 (14.3)	4 (12.9)	4 (7.3)	3 (10.7)	25 (12.2)
	そ の 他	16	12	14	23	16	81
	合 計	49	42	31	55	28	201
否定的 批評	嫌いなどころと一致	21	49	31	49	29	179
	容 認	34 (42.0)	80 (52.6)	49 (39.2)	76 (51.7)	45 (51.1)	284 (47.9)
	反 撥	27 (33.3)	24 (15.8)	30 (24.0)	27 (18.4)	16 (18.2)	124 (20.9)
	そ の 他	20	48	46	44	27	185
	合 計	81	152	125	147	88	593
中立的 批評	容 認	2	1	0	3	0	6
	反 撥	1	1	2	1	0	5
	そ の 他	7	10	10	5	6	38
	合 計	10	12	12	9	6	49
総 計		140	206	168	211	122	847

(註 表中の「容認」「反撥」は、自分自身の好きなどころ、嫌いなどころと一致している以外の批評について表現されたもので、批評を真実であると認めている場合を「容認」、認めていない場合を「反撥」とする。)

反応を合わせて示したのが、Table 9, 10 である。

表でみると、男女ともに、肯定的批評よりも、否定的批評を2倍から3倍以上も多く意識しており、さらに、自分の好きなどころ、嫌いなどころと一致するものを含めてみると、他人の批評のおよそ半数を自分にあてはまるものとして受けいれていることがみられる。男女差についていえば、女子は肯定的批評に対しては男子よりも多く反発し、否定的批評に対しては多く容認する傾向がある。年令的には、女子について、否定的批評の容認が下級生に多い傾向がみえるが、これはかれらが、自己に対してより否定的であることを意味するよりは、単に他人の批評を、そのまま受けいれやすいことを示すものである。また表には示されていないが、批評の受けとり方自体の発達的変化がみられ、下級生では「ほめられる」「叱られる」という意識をもつて受けとり、上級生では対等の立場に立つて公平に批判を受けるという態度であった。

批評者を明記したものだけについて批評者と反応との関係を見ると、Table 11, 12 のようになる。

批評者がかれらと近い関係にある家族とか教師である

場合は、その批評は真と認めて受けいれ、彼等と関係の薄い近所の人などの批評は、あまりあてにされず反撥される傾向がみられた。近所の人などの批評を容認している場合の多くは、親や兄弟の批評と重なっている場合であった。批評者が先生の場合は一般に、好評されれば単純に「うれしい」とよろこび、否定的批評に対しても「努力して改めよう」という態度がみられ、批評に対する容認と反撥の割合からみると最も多く受けいられるのは教師の批評であることを考えれば、両親とともに教師の影響力の重大さを思わせる。

その他に、批評の内容を(1)身体・能力、(2)性格・人格、(3)対人関係、(4)自己抑制のカテゴリーに分けて分析したが、表示は省略する。ここで肯定的批評よりも否定的批評が特に目立つて多かつたのは、身体・能力に関するものと、自己抑制に関するものであった。青年たちは容姿や動作、生まれつきの能力など、容易に変更しがたいものについての否定的批評に敏感であることは、考慮すべきである。また自己抑制については「怒りっぽい」という批評をすなおに認め、自分の怒りを相手のせいにすることはほとんどなかつた。「怒り」は自分自身の嫌

Table 11 批評者と反応（女子） 頻数と合計に対する容認・反撥の（％）

批評者	反応		容 認						反 撥						合計		
	学年		中			高			小 計	中			高			小 計	
			1	2	3	1	2	3		1	2	3	1	2			3
親			24	16	6	18	9	6	79 (78)	2	5	4	9	1	1	22 (22)	101
同胞・親戚			2	8	5	7	3	2	27 (82)	1	3	1	0	1	0	6 (18)	33
友人			11	3	3	8	2	5	32 (71)	0	2	2	4	1	4	13 (29)	45
先生			2	2	2	5	2	2	15 (83)	1	1	0	0	1	0	3 (17)	18
近所の人			5	1	2	1	3	1	13 (46)	5	2	3	1	3	1	14 (54)	28
計			44	30	18	39	19	16	166 (73)	9	13	10	14	7	6	58 (27)	225

Table 12 批評者と反応（男子） 頻数と合計に対する容認・反撥の（％）

批評者	反応		容 認					反 撥					合計		
	学年		中			高		小 計	中			高		小 計	
			1	2	3	1	2		1	2	3	1			2
親			8	15	10	13	12	58 (75)	3	5	3	2	6	19 (25)	77
同胞・親戚			4	5	1	8	5	23 (62)	2	4	0	3	5	14 (38)	37
友人			6	0	3	3	2	14 (50)	2	3	4	3	2	14 (50)	28
先生			3	3	3	7	3	19 (86)	0	0	1	1	1	3 (14)	22
近所の人			3	2	3	0	2	10 (42)	4	4	2	2	2	14 (58)	24
計			24	25	20	31	23	123 (65)	11	16	10	11	17	65 (35)	188

（註 この表では、自分自身の好きなどころ、嫌いなところと一致しているものも「容認」の中に含まれている。）

いなところとしても多くあげられ、他人の否定的批評との一致度も他のカテゴリーに比べて最も高かった。これは、怒りの情緒が自己にとって苦しいものであるばかりでなく、怒りを向ける他人からの否認がかれらを脅かしていることを示しているとも考えられる。肯定的批評と自分自身の好きなどころとの一致度が、内容的にいつて「親切」とか「従順」など、対人関係を含むものが高位を占めていることを併せ考えれば、他人からの是認や否認が、自己評価に深い関係のあることを予想させる。

2) 他人にどう思われているかという意識と自己に対する態度との関係

他人が自分をどう思っているかという理解の仕方と、自分自身に対する態度との関係をみるために、試案的に次のような調査（質問紙）を行なった。

方法は、最初に、自分が他人よりすぐれていると思う点と劣っていると思う点との有無を尋ね、もしあれば、それを (1)容姿 (2)身体 (3)技能 (4)趣味 (5)学校の成績 (6)性質 (7)人柄 (8)家庭 (9)その他の9項目の中から、いくつでも選んでチェックさせ、選んだ項目には簡単な説明を加えさせる。

次に、自分が他人よりすぐれていると思う点についてどう思っているかを、次の項目の中から3つ選択させる。（自分の気持に近いものから順に番号をうつ。）

- (X) すぐれていても仕方がない。なんにもならない
- (X) 自慢の心が出てくるからかえつてよくない。
- () よろこんで感謝している。
- (X) 他の人に追い越されはしないかと思つて心配する。
- () 希望をもつて努力する。
- () できれば他の人のために役立てたい。
- () その他（下の空白に気持を書いてください。）

同様にして、自分が他人より劣っていると思う点についてどう思っているかを、次の項目の中から3つ選択させる。

- (X) ゆううつ。暗い気持。
- () 自分もできるだけ頑張ろうと思う。
- (X) 仕方がない。
- () 謙遜になつてかえつていい。
- (X) 反抗的になる。
- () 気にしない。

() その他(下の空白に気持を書いてください)

これらの項目の中で×印をつけたものは×印をつけない項目に比べて、自分のすぐれている点、劣っている点について、比較的消極的な態度を示すものである。それで、この×印の項目を選択したものにそれぞれ1点を与えて、自己に対する「消極性」の得点とした。したがって消極性の最高点は6点となる。「その他」を3つの中から選んだものは、空白に記された説明から、消極的なものか、積極的なものかを、他の項目と比べて判断する。

次に「自分がわるくないのに他の人が自分に対して怒る場合」の例として、次の5項目をあげ、自分の場合に最もあてはまると思うものから順に番号をうたせる。

(その他も含めて)

- () 誤解(その人に別に悪意はないが、なにかの事情や第三者の話などによつて、わたくしをわるいものに思い違えて怒る。)
 - (×) 嫌悪(その人がなにかのことでわたくしを前から嫌つて、にくらしく思つているので、他の人には怒らない場合でもわたくしには怒る。)
 - () やつあたり(その人の体の調子が悪いとか、疲れているとか、なにかがうまくいかないとかいうことで、機嫌がわるく怒りつづくなつていてちよつどわたくしがそばにいたので怒る。)
 - (×) 色めがね(その人が前からわたくしのことをあまり信用していなかつたり、あるいは馬鹿にしたりしているのので、別に悪いことでなくても、すぐ悪く解釈して怒る。)
 - () ねたみ(その人がわたくしに対して、ねたみや競争心をもつているために、わたくしに怒つづくなつていて、あたりまえのことをしていても怒る。)
 - () その他
- この中で×印のあるものは、他人から「嫌われてい

る」とか「信用されていない」とかの感情をもっていることを反映している。これらの感情は直接尋ねることがむづかしいので、他人の怒りの解釈から引き出すことを工夫した。そうして、この他人の怒りに対する解釈と、前の自己に対する「消極性」との関係のみようとした。

調査対象は、中学1年から高校3年までの女子生徒、各1学級あて、計6学級285名であつたが、その中、両方の質問に答えたものは228名である。

解釈の中で、「嫌悪」と「色めがね」はともに他人の怒りを、いわば自己に対する悪意に解するものであるのので、これをいつしよにして、これらのいずれかに1位または2位を与えたものを仮に「悪意の解釈を与えた者」(B)と名づけ、1位または2位に、「嫌悪」と「色めがね」のいずれも選ばなかつた者を仮に「善意の解釈を与えた者」(A)と名づけて区別した。予想としては、Bグループの方がAグループよりも、自己のすぐれた点、劣つた点についての「消極性」の得点が高いであろうと思われた。すなわち、他人が自分を嫌つているとか信頼していないとかいう感情をもつ者は、これを持たない者に比べて、自分のすぐれた点に対しても劣つた点に対しても、より否定的、消極的であるということがないだろうか。

結果は Table 13 に示される。

各学年を通じて、AグループはBグループよりも「消極性」の得点の低い者が多い傾向がみられる。 $(\chi^2$ 検定 $p=0.01$ で有意)

中学1、2年では、他の学年に比べて、Aに対するBの比が大である。 $(\chi^2$ 検定 $p=0.05$ で有意)それにもかかわらず、消極性の得点の低い者が割に多いことは、前にも述べたが、かれらが上級生に比べて、自己の劣性を意識していてもなお希望的であることによるのではないかと思われる。実際、「自分もできるだけ頑張ろうと思う」の項目にチェックしたのは下級生に多かつた。

Table 13 A, Bグループの「消極性」の得点

「消極性」の得点	学年(人員)		中 1 (45)		中 2 (32)		中 3 (39)		高 1 (39)		高 2 (35)		高 3 (38)		計 (228)	
	グループ		A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
低い者 (0, 1点)	17	7	12	4	17	2	10	3	18	3	15	3	89	22	111	
高い者 (2点以上)	10	11	9	7	13	7	18	8	10	4	14	6	74	43	117	
得点合計	41	35	32	21	45	22	49	22	37	14	41	17	163	65	228	
人数合計	27	18	21	11	30	9	28	11	28	7	29	9				
平均点	1.5	1.9	1.5	1.9	1.5	2.4	1.7	2.0	1.3	2.0	1.4	1.9				

「ねたみ」を1, 2位に選んだ者と、選ばなかった者との「消極性」の得点の平均を比較してみたが、両者の間には一定の傾向がみられなかったため、A, Bグループの消極性の得点の差は、「ねたみ」をいちおう除いて考えてよいのではないと思われた。

いうまでもなく、これらの感情を分けて考えることは不可能なことであり、正しくもないと思う。また、この調査はまったく試案的なものであつて、調査紙の構成、採点法や処理法の妥当性もまだ十分に検討されていない。しかし、対人関係、特に他人に対して持つ感情のあり方が、自分自身に対する態度に関係をもっているということ、他人に対して肯定的な理解をもつ者は、自己に対しても肯定的、積極的であり、他人に対して否定的な理解をもつ者は、自己に対しても否定的、消極的であるということがいえると思う。

3) 自己および他人に対する態度の発達的变化

2)の調査で、中学1, 2年では、上級学年に比べて、わずかではあるが、他人の怒りに対して「悪意の解釈を与える者」が多くなっていることをみた。それで、他人に対する理解が、どのように発達するかを、今度は自分の怒りに関する考えからみることにした。前述の調査表で、

問4：他の人があなたを怒らせたり、嫌な気持ちをもたせるのは、どんなときですか。それについてあなたはどのように思いますか。

と尋ねた。ここでは、何について怒るか、ということよりも、なぜ怒るかということについてみるのが主な目的であり、質問の後半は、わざと漠然とした聞き方をした。結果を、後半の「それについてあなたはどのように思いますか」に対する答だけについてみると、大体次のAからGまでの種類に分けることができた。

- (A) 怒らせるようなことをする相手がある。反省してほしい。自分だつたらそんなことはしない。
 - (B) 怒るのは自分がまちがっている。心が狭く、怒りっぽいのだ。自分は情けない性質だ。
 - (C) 自分がいやな感じを与えられたから、自分は同じことをしないように注意しよう。
 - (D) 相手に不愉快を感じるのは当然だが、自分の方にもいく分か原因がある。
 - (E) 相手に不愉快を感じるのは当然だが、自分だつて同じことをする。
 - (F) 怒る感情は人間として当然で、それを自分が情けないとは思わない。
 - (G) ほつておく。その場をさける。その他の処置法。
- 男女別、学年別に表にすると、Table 14, 15 のよう

Table 14 自分の怒りに関する考え (女子)
人数と回答者に対する%

内容	学年 (回答者)						
	中1 (86)	中2 (89)	中3 (50)	高1 (97)	高2 (44)	高3 (39)	計 (405)
A	63人 73.3%	53 59.9	27 54.0	25 25.8	16 36.3	11 28.2	195 48.8
B	10 11.6	8 9.0	4 8.0	9 9.3	2 4.5	6 15.4	39 9.8
C		3 3.4	9 18.0	20 20.6	7 15.9	4 10.2	43 10.8
D	2 2.3	3 3.4	3 6.0	24 24.7	10 22.7	10 25.6	52 13.0
E				7 7.2	4 9.1	6 15.4	17 4.3
F				2 2.1	5 11.4	1 2.6	8 2.0
G	11 12.8	22 24.9	7 14.0	10 10.3		1 2.6	51 12.8

Table 15 自分の怒りに関する考え (男子)
人数と回答者に対する%

内容	学年 (回答者)					
	中1 (58)	中2 (61)	中3 (45)	高1 (66)	高2 (65)	計 (295)
A	44人 75.7%	38 62.3	12 26.6	19 28.9	21 32.3	134 45.6
B	2 3.4	4 6.6	5 11.1	5 7.6	11 16.9	27 9.2
C	3 3.4	4 6.6	1 2.2	2 3.0	1 1.5	11 3.7
D	5 8.6	9 14.8	4 8.9	16 24.3	12 18.4	46 15.6
E				5 7.6	1 1.5	6 2.0
F				3 4.6	5 7.7	8 2.7
G	4 6.9	6 9.8	23 50.1	16 24.3	14 21.6	63 21.4

になる。

表から推すと、概して下級生では、自分に対して他人に対しても要求が強く、自分が他人に怒るのは、怒らせることをする他人が悪いのであり、自分はそのようなことをしない、相手は反省すべきである、というように他人を責める。あるいはそうであれば、怒ること自体を悪いこととして自分を責めるのである。これに対し、上級生になると、他人から与えられた不快感から自己を反省することにはじまり、他人ばかりを責めることができず、同じ弱さを自分にも認め、他人を責めるにも手やわらかくなる。同時に怒ること自体も、ひとつの人間の能力として認めるようになってくると思われる。もちろん、どういう場合の怒りであるか、ということによつて怒りに対する態度も異なってくるであろうから、それについての分析も必要であろうが、ここでは複雑になるので、だいたいの傾向をみるにとどめた。この上級生と下

級生との差異は、他から与えられた規範をそのまま自己および他人に適用する態度から、自分自身の体験をとおして、自分にも一律に適用できないとわかつた規範を他人にも一律に適用しないという態度への変化を示し、また自分を判断する主我の目ざめが、他人の立場に立ってみる能力を可能にし、それが主観的で一方的な見方を少なくする、と解されよう。要するに、自分に対してある意味で寛大になるならば、他人にも寛大になりうる事が考えられる。

前の他人の怒りの解釈についての調査と関連して考えると、自分の怒りは、つねに相手が変わるいからであるという考え方をして、そこに自分の側の「誤解」とか「やつあたり」とかが原因することも考え及ばないならば、他人が自分に怒る場合は自分が悪いと相手は思うに違いないと考える。しかし、自分が悪くないとすれば、相手は自分を嫌いであるか、ねたんでいるか、信頼していないとかで怒る、という解釈が先になるのではなからう

か。もしそうならば、自分と他人の怒りについての考え方においても、下級生と上級生の、自分および他人についての理解の相違を見ることができたと思う。そうして自分に対する理解と他人に対する理解との間に、ここでもやはり相互関係のあることが考えられる。このことは上のような調査法では不十分であり、また年齢差のほか個人差もあるので、さらに研究法を工夫しなければならない。

Ⅳ 自我の生長における他人の役割と自己受容の問題

青年期には特に他人からの是認や否認に対して敏感であることは、青年たちに、一番うれしいこと、悲しいこと、苦しいこと、腹立たしいこと、うらやましいこと、こわいことを、一つずつ書かせた結果 (Table 16) によく示されている。

このことは、当然、他人の評価や態度が自己評価に大

Table 16 情緒と他人からの是・否認 人数と%

学 年 (人員)		中 1 (42)	中 2 (48)	中 3 (43)	高 1 (48)	計 (181)
一し 番い うこ れと	(応答者数)	(42)	(48)	(39)	(48)	(177)
	ほめられること 理解し愛されること 誤解がとけること 親切にされること	7 } 1 } 10 1 } 23.8% 1 }	4 } 5 } 11 0 } 22.9 2 }	6 } 6 } 18 2 } 46.2 4 }	4 } 13 } 20 0 } 41.7 3 }	59 33.3
一い 番悲 し	(応答者数)	(36)	(47)	(36)	(46)	(165)
	叱られること 誤解され軽蔑されること 理解されないこと 嫌われ仲間はずれにされること	4 } 1 } 11 1 } 30.6 6 }	6 } 8 } 20 6 } 42.6 6 }	3 } 13 } 20 2 } 55.6 2 }	5 } 8 } 17 4 } 37.0 0 }	68 42.4
一い 番苦 し	(応答者数)	(32)	(33)	(35)	(39)	(139)
	非難・叱責・悪口されること 理解されず、誤解されること 心をうちあけられないこと 仲たがひ、孤独	1 } 0 } 2 0 } 6.3 1 }	4 } 3 } 11 2 } 33.3 2 }	2 } 3 } 9 2 } 25.7 2 }	1 } 2 } 7 0 } 17.9 4 }	29 20.9
一し 番い こ 腹 立 た	(応答者数)	(34)	(40)	(37)	(42)	(153)
	誤解されて叱られ、または愛を失うこと 無視され馬鹿にされること 信用されず、理解されないこと 悪口されること	9 } 7 } 17 1 } 50.0 0 }	6 } 8 } 24 7 } 60.0 3 }	5 } 13 } 20 5 } 54.1 7 }	3 } 7 } 18 6 } 42.9 2 }	79 51.6
一ま し う ら い こ や	(応答者数)	(28)	(41)	(31)	(44)	(144)
	仲よし、親友をもっている人 相談相手、理解者をもつ人 他人から愛と尊敬を受けている人	2 } 1 } 4 1 } 14.3 1 }	2 } 1 } 4 1 } 9.8 1 }	6 } 0 } 12 6 } 38.7 6 }	0 } 1 } 6 5 } 13.6 5 }	26 17.9
一 番 こ わ い こ と	(応答者数)	(32)	(41)	(29)	(41)	(143)
	叱られること 誤解されること 他人から評価されること 他人からうらみを受けること 他人を悲しませること	1 } 1 } 2 0 } 6.3 0 } 0 }	7 } 0 } 7 0 } 17.1 0 } 0 }	1 } 0 } 3 1 } 10.3 1 } 0 }	1 } 0 } 2 0 } 4.9 0 } 1 }	14 9.8

(註 項目によつて応答者数が異なる)

きな役割を演ずること、ひいては自己受容の問題に関係してくることを意味している。感じやすい青年たちが、他人の評価や態度を自己のものとしてとりいれ、自己を過小評価して真の可能性への努力を怠つたり、あるいは過大の理想我によつてフラストレイトされることもある。ところが、他人のかれらに対する実際の評価と、かれらのそれについての意識とは必ずしも一致しない。また他人の評価自体が現実的なものもあり、非現実的なものもある。したがつて、かれらが他人の態度や評価を正しく理解し、現実的に自己を認識して、真の可能的自我を実現することを得るための援助が必要であると思われる。

自己受容を助けるものとして、たとえば、自分と他人の判断の仕方を比較するテクニクや、ロール・プレイングやディスカッションを用いて、他人の評価に対する正しい判断力を養うこと、あるいは、可能的自我における価値を転換させることなどが考えられよう。

多くの青年たちが、自己および他人について理解することへの関心、ディスカッションや助言に対する要求を、調査表の問5（前出）に対する答に示したが、かれらの興味を教育において生かすことは、やがて、自己および他人を受け容れる基礎になると思われる。

V 結 論

青年期の自我の形成を、一般の中・高校生を対象として、主に社会的関係において考察したが、かれらの自己に対する態度は、他人からかれらに示される態度に関係がある。いいかえれば、他人が自分をどうみるか、という自己の判断が自己受容に影響すること、また、他人に対する態度と自己に対する態度との間に関係のあることがみられた。このことは、健全な自己受容を促進するためには、自己および他人の正しい理解を養うことが指導

されねばならぬことを強調する理由となる。

また青年期においても、発達段階によつて、性別によつて、自他の理解の仕方そのものに変化のあることがいろいろな角度からみられた。それは指導が発達段階に応じて、男女差に応じて、夫々の特色を生かしながら適切に行なわれるために参考になると思う。

しかし自己理解の問題は、年齢差、男女差と共に、大きな個人差があり、他人から拒否された子どもと受容された子どもの自我の形成において、前者が後者よりも他人の評価に敏感であり、影響されやすいと思われる。しかし、この点については資料が十分でなかつたので、ここにはふれなかつた。

文 献

- (1) 自己受容の問題に関しては、次の書から示唆をうけた。
 Jersild, A. T. : *The Psychology of Adolescence*. The Macmillan Company. 1957.
 ———— : *When Teachers Face Themselves*. Bureau of Publications, Teachers College, Columbia Univ., 1955.
 ———— : *Self-Understanding in Childhood and Adolescence*, *American Psychol.*, 6, April, 1951, 122—126.
 Jerild, A. T. & Helfant, K. : *Education for Self-Understanding*. Bureau of Publications, Teachers College, Columbia Univ., 1953.
 - (2) ジェームズ, W. (今田恵訳) : ウィリアム・ジェームズ 心理学, 岩波書店 1927, 第12章
 - (3) 北村晴朗 : 人間の仮面的行動. 東北大学文学部研究年報 (第5号) 1954.
- (1959年8月27日原稿受付)